
この恋の行方

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「この恋の行方

【著者名】

鹿の子

【あらすじ】

義姉弟を中心にして、それぞれの恋の行方を描いています。

気がついたら、好きだった。

ただ、それだけのこと。

(「雨傘」より)

悲恋ですので、くれぐれもご注意ください。

「恋愛のすすめ」より独立。

サイト引っ越し
転載

軒下に吊つてあるサークルに洗濯物を干し終わった途端、部屋のベルが鳴った。

窓ガラスを急いで閉めて、そのまま玄関に向かつた。木の薄いドアを開けると、そこには田線が同じになつてきた弟が紙袋を持って立つていた。

「おす」

弟が挨拶をしてくる。

「おっす、たーさん。まあ、まあ、入りなせーな」

私がそう言うと弟は「おじやまします」と言つて、体の割にはでかいスニーカーを脱いで部屋の中に入つてきた。

私も弟も、百七十センチはあつて。

だから、一人がいるとこの小さな部屋がますます小さく狭くなつた気がした。

「こ」は、春から私のお城になつたアパートの一室で、そしてこのお城は弟が住む私の実家から歩いて5分の徒歩圏内にあつた。

「これ、母さんからの差し入れ」

弟が差し出した紙袋はずしりと重く、そして「こ」の中にはいつもの「ごとくいくつかのタッパーにおいしいおかずがうんと入つていてるだ。

「すごいなあ」

私は受け取つた紙袋をキッチンとは名ばかりの場所へと運んだ。弟が壁を背中に、ゆつくりと座るのが見えた。その前には小さなテーブルがあつた。

「麦茶、飲む？」

弟に聞く。

「うん。飲む」

弟が答える。

コップを一つ出して、冷蔵庫から出した氷を入れる。

そして、冷蔵庫に入っている麦茶を出して、それに注いだ。透明感のある茶色の液体が、氷をゆっくりと持ち上げていく。

両手にコップを持ち、弟の前にあるテーブルへと置いた。置いた瞬間にもまた氷はゆっくりと動いた。

「冷たそつ」

弟が言つ。

「冷たいよ」

私が言つ。

弟は麦茶が好きだつた。

だから家では一年中麦茶が冷蔵庫に入つていた。

私にこの弟ができるから、私の中では麦茶は夏の季語ではなくなつてしまつた。

そして私も、こつして麦茶を一年中飲む女になつてしまつたのだ。

「あ、紙袋の中に文化祭の写真を入れてきたんだつた
麦茶のコップを手に持つたまま弟が言つた」

「なんだ。持つてくるよ」

そう言つて私は弟から渡された紙袋の中を見にいった。
背中で、からんからんという氷の音が聞こえた。

弟が麦茶を飲む音だ。

一人暮らしを始めてから、一番懐かしいと思つ音がこれだつた。

からん からん

弟が麦茶を飲む音。

弟が。

紙袋の中には、弟が言つたとおりに写真が無造作に突っ込んであつた。

それを全部取り出して、写真を見ながら弟がいる場所へと戻る。
「相変わらず無法地帯のような学校だね」
くすくすと笑いながら弟から少し離れた場所へと座る。
「ううかな？ もう、その状態に慣れてて麻痺しているのかも」
弟もそう言いながら笑う。

弟の学校は秋でなく春に文化祭がある。

私も何度もお母さんと一緒に行つたことがあるけれど、あの学校に行くと毎回身の置き所がないような気分になつたものだ。
お母さんもそれは同じようで、「沙穂ちゃんが一緒でほんと助かつたわ」と言つていた。

その頃も父は仕事が忙しくて、なかなか家族で何かするってことができない状態だったのだ。

何枚か写真を見ていくうちに弟の親友くんが写つていた。

「あ、神山くんだ。またすごい髪の色しちゃつて」

神山君は会うたびに髪の色や髪型が変わっていたのだけれど、今回は髪の色は灰色だつた。

しかも長いもんだから、下手すると山姥にも見えた。

「それ、染めるの俺も手伝つたんだ」

「へえ、男の友情だね」

自分の髪はいつも真っ黒なのに、そんな弟が友だちの髪を染める

のを手伝つたなんて、考えただけでも微笑ましいというか、可笑しかつた。

「神山が、今年は来ないんだねって言つてた」

「え？ それって私のこと？」

えへへと笑いながらその話題をするりと抜けようと、また次の写真を見た。

そこには、文化祭で使う資材をあれこれと運んでいる弟の姿が映つていた。

「縁の下の力持ちだ。たーさんは」

そう言つてその写真を弟の方にぱっと向けた。

弟が静かに笑つた。

そんな弟の様子を見て、私がこうして一人で暮らし始めたのは大正解だったと思つた。

もう、弟だなんて言えないくらい、たーさんは大人になつていたから。

「沙穂。付き合つて」

弟がまっすぐに私を見て言つてきた。

「たーさんが、大学に入つたら考える」

「沙穂は前、『高校になつたら』つて言つた」

弟が間髪いれずにそう言つた。

「だつて、私は嘘つきだもん」

私が答える。

「分かつた。大学だな。俺が大学に入つたら考えるんだな」

弟が念を押すかのような口調でそう言つた。

「うん。国立大学ストレートで入つたらね」

私がそう言うと弟は苦笑した。

「沙穂は」

弟はそう言つたまま言葉を切つた。

私はその先の言葉を聞くのが怖くて、ただただテーブルの上に置いた麦茶のコップを命綱のように両手で握っていた。

「なんでもない」

弟はそう言つと、麦茶を一気に飲み干した。
さつきよりも乱暴に氷がぶつかる音が聞こえた。

からん からん からん

小さなテーブルの上には、氷しか残っていないコップとまだ一口も麦茶が減っていないコップがあつた。

それはまるで、二人の覚悟の違いをも表しているみたいで。

ためらい、とまどい。

そんなものがうんと詰まつた私みたいに、私のコップには麦茶がいっぱいいっぱい入つていた。

「帰るよ」

そう言つと弟は立ち上がり、そしてすたすたと玄関に向かつて歩き出した。

弟がスニーカーを履いた。

「父さんも母さんも沙穂のこと気にしているから。事務所開いて家が狭くなつたから沙穂が出て行つたと思っているから」「うらやましいだけ少し角度を変えてこつちを見ながら弟がそう言つた。

「それ、ほんとうのことだもん」

それをチャンスとばかりに一人暮らしを言い出して始めたのは、ある面から見たらほんとのこと。

「嘘つき沙穂」

弟が私を見ないでそう言つた。

そうだ。

私は嘘つきだ。

そしてその嘘を、弟と私は共有している。

「お母さんにお礼を言つておこでね」

弟の背中に声を掛ける。

「そんなことは、自分で電話しなさい」

弟が振り向かざまにそう言つて笑つた。

その笑顔に負けないくらいこじりちも笑つた。

笑いたくもないのに、笑つた。

扉が閉まる。

その瞬間、私の顔から笑いが消えた。

何の表情もなくなっていくのがわかる。

隣り合つ部屋から、徒歩五分の場所へ。

そして、徒歩五分の場所からもつと遠くへ。

十歳の時にできた一つ下の弟を好きになつてから、私は彼から逃げる」とばかりを考えている。

こんなに近くで、恋を見つけたくなんてなかつた。
こんなに切なくて、強い想いなんて見つけたくなかつた。

こへり血は繋がつてこなくとも、やつぱり弟は弟で。

常識と人の目を気にしてしまつ私には、「弟」との恋愛は受け入れられないものだった。

早く逃げなきや。

もつと、もつと、もつと遠くに。

しづらへ私はそのまま玄関に立つたままだったのだらつ。

振り向いた私の目に映つたのは、麦茶のコップの中で解けて小さくなつた氷が情けなさそうに浮かんでいる、そんな姿だった。

アッシュ グレイ

つんとした臭いが鼻をつく。

その臭いに小さく咳き込む。

乾いていた髪が、段々とそのつんとした臭いとともに湿っていく。

地肌にその液体がつき、ひやっとする。
気持ちが悪い。

田の前の姿見には、やつてもうつっているのに「早く終わらないかな」なんて思いを顔に出しながら椅子に座っている俺と、透明なビニールの手袋を嵌め黙々と作業をしてくれている同級生の森谷^{もりや}匠^{たく}の姿が映っていた。

一体何をきっかけに、森谷が俺の髪を染めるのを手伝うようになつたのか。

そんなことは忘れてしまったのだけど、「あー、そろそろ髪の色を変えてえ」と俺が言つと、森谷は「いつでもいいよ」と言つてくれる。

髪の色だけじゃなくて「あー、ちょっとこれどうにかした方がいいべえ」と俺が言つと、「そうだね。じゃ、どうしようか」と森谷は言つてくれる。

まあ、がたいもビジュアル的にも俺のほうが目立つので、たいてい俺が壇上に立つたりマイクを握つたりしていかにもリーダー面をしちゃつているわけだけど、知る人ぞ知る影の実権を握るのは森谷匠だつたりするのだ。

縁の下の力持ちと言えば聞こえはいいが、そんなもんじゃない。

知能犯。
確信犯。

森谷 匠だけは、敵にまわしたくない男だった。

まあ、そんなこといつと、いかにもさすがの賢そうな雰囲気のヤツだと思つだらうけれど、こんな少年少年したヤツは同じ学年を見渡してもそういうはない。

身長だって、五七十あるかないかだし、体も華奢なつくりをしている。

俺と並ぶと弁慶と義経だって、そんなことも言われるくらいだ。たまに口が悪い奴等は、「おまえら、『テキテルの?』なんてことを言つてきまする。

まあ、つまりが、仲がいこってことなんだと思つ。

「なあ。今年は文化祭に姉ちやん来るの?」

森谷に聞く。

一週間後には、うちの学校の文化祭がある。その文化祭にて、中二年ではここにこの母ちやんと姉ちやんが揃つてやって来ていたから。

「ああ、どうかな」

すすす、と森谷が髪をパーティに分けて、今度はそこを染め出した。

その返事で、ああやつぱり今年も来ないんだな、なんて思った。なんとなく。

「あのわ。森谷、おまえさ

「まつあん、入るよ」

その声とともに、トレイを持つ四十万 じっせん 裕香が鏡の中に映つた。

「おまえ、今、フライングだつたら」

入るよ、なんて声よりも先に、裕香の体はこの部屋に入っているのを「ンマ何秒かのことだけれど俺は見たから。

「いやあ、まつあん。視力いいねえ」

そう言いながら裕香はトレイを床の上に置き、部屋の隅に置んで

立てかけてあつた折り畳みの椅子を持つてきて広げて座った。

「こんなにちは、森谷君」

裕香が言つ。

「こんなにちは」

森谷も言つ。

「なんだ、その優等生な挨拶はよお

くそ氣味悪い、なんて思にながら俺はそいつ言つた。

「松三は口が悪いなあ

裕香はいつも『まつつかん』って俺を呼ぶくせに、お説教じみたことを言つ時は必ず『松三』と呼ぶ。

それは、今は亡き俺の母ちやんの癖なんだけれど、それを裕香は継承しているのだ。

誰の許可もなく。

「ほら、ジュークとお菓子。まつあんのじだだから何も出していい」と思つてさ」

確かに用意なんてしていなかつた。

が、しかし。

そもそも男は、今日裕香が用意したようなアセロラのジュークだの（あいつは今これに凝つている）クッキーだのワッフルだの（つまり粉から出来た甘いもん）そんなもんは、飲んだり食つたりなどしないのだ。

まあ、嫌いって訳ではないが。

「今度は何色なの？」

裕香が俺じやなくて、森谷に聞く。

「箱には、アッシュコグレイつて書いてあつたよ」

森谷が答える。

「ふーん。なんだそりや」

裕香が言つ。

「アッシュコグレイだよ。ほんぐわい共学生」

裕香に並べ。

裕香は中学の時から男女共学の学校に通っている。

俺は中学から男子校。

同じ小学校に行って、塾も同じだつたけれど、その先の進路は大きく違つていた。

「そんなの意味はわかるけれど、そういうことじゃなくて、『なんでそんな色に染めるの』って意味よ」

裕香が言つ。

「ふふ。この色はかとなく混沌とした色の味わいは、おまえさんには分かるまい。おまえんとこの軟弱な男どもで、そんな髪の色のヤツはいないだらうからな」

俺がそう言つと裕香の顔が曇つた。

「ふん。混沌としているのは、松三の脳みそでしょ。それにそういう色、どつかで見たことがあるのを思い出しちやつたもんね。この、屁理屈大魔王がつ」

そう言つと、つーんとした顔で裕香はかがんでコップを取り、ジュースを飲みだした。

薄ピンク色した液体が、裕香の細い喉を通つていく様子が鏡に映る。

裕香の喉が「ぐぐぐ」と動くのが見える。

そんなのを見ると、つこつこ今まで唾を飲み込みそうになつてしまつ。

やばい。

森谷だつているんだし。

いや、いなくたつて、こんな反応はまずいだらう。

まずい。
まずい。

ただでさえ、裕香の家とうちの親父で、俺たちをどうにかしよう
なんて話が出てこないっていうの。」

そんなところに、もし、俺が裕香に手を出したなんてことがあつたのなら。

明日にでも役所に向かうはめになつてしまつ。

確かに、裕香は結構いいやつだつてことは分かつている。
前向きだし、明るいし。

何よりも、心がまっすぐで裏がない。
あんなんじや、これから的人生騙されてばっかりだらうなあ、な
んでヒトコトながらやつと思つ。

俺が、中学・高校と女の子と付き合つても、どうもしつべつこな
いのはどこか頭の隅に裕香がいたからだと思つ。

多分、俺は裕香が好きなんだと思つ。

……多分。

しかし、まだ早い。

だから、まずいのだ。

非常に。

「最近、親父の再婚なんて話もちらほら出ている。

親父としては、どうも自分だけ幸せになるのは申し訳ないって思
つて、俺にも誰かいたほうがいいなんて思つてているみたいだけれど。

兄貴たちが独立して家を出でしまつたので、この家は俺と親父の
二人だつたから。

余計に、そう思つんだろううけれど。

もし、裕香と付き合いでもしたら。

十ヶ月後には俺は『親父』になつてゐるかもしない。

何もしないで済ませるほど、俺は大人じゃない。

愛情とかそんなこと抜きにして、あいつがシユースを飲んでいるのを見ただけでやばいんだから。

それが自分でも怖いくらいわかつてゐるからこそ、近づきたくないし、近づいてきて欲しくもない。

俺だつて、裕香だつて、まだまだ勉強したい」とつてたくさんあるわけだし。

だから、まずいのだ。

「おまえ、といとと自分の家に帰れ」

裕香に言つ。

「そんな頭して、威張つちやつて」

確かに、俺の頭は今「途中経過」でちつともカッコ良くはない。
「いぢいぢうるさこな」

裕香に言つ。

裕香はすつと肩をすくめる仕草をした。

「ねえ、文化祭のことだけれど」

裕香が森谷に向かつてそう言つた。

「うん。来られそう?」

森谷が言つ。

「そこのの、クラブの予定がずれたから友だちを連れて三人で行こ

うと

「來ても入ることはできないぜ

は？ つて顔で、鏡の中の森谷と裕香が俺を見る。

俺は、こほんと咳をひとつする。

「今年からうちはチケット制になつたのさ。そしてもうチケットは配布済みなのだよ。残念だねえ、裕香くん」

「ほほほほ、と笑いながら裕香を見る。

「松三。チケットなら既に貰つていたけれど。森谷君から裕香が眉間に皺を寄せて俺を見ている。

「松三。あんた、このアタシを締め出そうとしたわね」

そして、そのままの顔で森谷の方にも視線を移した。

「で、森谷君、あなたこれを松三からつて私に嘘をついたわね」

裕香は俺たち二人をぎろりと見ると、ポケットをから『そー』そとチケットを取り出した。

アッシュユグレイな色をした三枚の細長いチケット。

それを椅子から立ち上がった裕香はびりびりと破ぎだした。

アッシュユグレイの紙がひらひらと床に落ちていぐ。

破られたのは紙なのに。

落ちていくのも紙なのに。

見ているところが痛くなつた。

「ばか

破いたチケットを撒き散らしたまま、裕香は部屋から出て行った。

さつきの裕香のよつこ、俺はすつと肩をすくめる仕草をした。
それを見た森谷が「ごめん」と言いながら再び俺の髪を染め出し

た。

「おまえが謝るなよ」
つんとした臭いにむせるふりをしながら、『ほほ』と俺は咳き込んだ。

「ううう、これでいいのや。

これで裕香もうちには来ないようになるかもしないし、それは願つたり叶つたりのことだから。

俺だつてまだまだやりたいことがたくさんあつて。裕香だけにしばられるなんて、今は『』めんだから。

でも。

今、突き放した人を、自分の都合がよくなつたからといって、引き寄せることが出来るんだろうか？

「俺、しぐじつたかな」

鏡に映る森谷に聞く。

「しぐじつたというか」

そう言つたあと森谷は「はい、終了」と慌て道具を片付け出し、そしてぽつりと「贅沢」と言つた。

「贅沢？」

森谷に聞き返す。

「うん。神山は、贅沢だな」

そう言つと森谷「洗面所を借りるよ」といい部屋から出で行つた。

確信はないけれど、森谷は自分の姉ちゃん（つて言つても義理らしいが）のことを、好きなんだうなあと俺は思つてこる。森谷は何も言わないけれど、なんとなく。なんとなくなんだけれど。

自分の姉ちゃんを好きだなんて。

複雑だ。

「贅沢かあ」

贅沢かあ。

贅沢かな。

……贅沢かもしねない。

でも、それでも、だからといって。

「ああ～、面倒くせえ」

床にちらばつたチケットの残骸を拾いだす。

破れたチケット。

でもそれの裏にはそれを破いた人の心がある。

机の上に置いてある小さなプラスチックボックスの空の引き出しを取り出して、拾ったそれを全て入れた。

そしてその箱をセロハンテープの側に置いた。

つんとした臭いが鼻をついた。
小さく咳き込む。

かがんで手にとり飲んだアセロラのジュースが、少しだけ喉にし
みた。

図合

「森谷さん」と呼ばれ振り向くと、頬に冷たい缶が当てられた。

「岩田さんから、森谷さんに渡してくれって頼まれて」
私の頬に当たった缶のドリンクを、辰巳君たつみがそのままテーブルの上に載せた。

「ありがとう」と私が言つと「どういたしまして」と辰巳君は言い、そのまま回つあるイスの一つに座つた。

「岩田さん、国山とちょっと話をしてから来るみたいだよ」

「あ、そつなんだ」

最近、イワが国山君と仲がいいのは知っていた。

私もイワも国山君もそして辰巳君も、高校の時に同じ塾に通つていて同じ大学に入った仲間で、学部はそれぞれ違うのだけれど顔を合わせればこうして一緒にお茶を飲んだりするような仲になつていた。

「まあ、いい加減あの一人もまとまるでしょ」

思ったよりも時間がかかつたよなあ、辰巳君はそう言つと、頬杖をついた。

「せっかく一緒のキャンパスにいるんだから、今のうちに楽しまないとね」

うちの大学は、最初の一年間は学部に関係なく同じキャンパスで、三年からはそれぞれの学部によつてキャンパスが変るのだ。

私とイワは学部は違うけれど三年生になつても同じキャンパスに、辰巳君と国山君はそれぞれ違うキャンパスに行くことになる。

キャンパスが変ることで別れるカップルも多いといつのは、有名な話だ。

「森谷さんもね」

そう言つと辰巳君はテーブルに載つたままの缶をゆっくりと自分の方に向けた。

「『茨城県産 六条大麦使用』だつて。森谷さんつて、一年中麦茶を飲んでいるよね」

まあ、俺も好きだけども、麦茶。

そう言つと、辰巳君は思わずぶりな視線を私に送つてきた。

「付き合つ、つて。はあ？」

イワの可愛い眼鏡が漫画のようにズリッと下がつた。

「ええと、付き合つのは、私とクーちゃんなんだよ？」

下がつた眼鏡を上げながらイワが眉間に皺を寄せて言つた。

「うん、その、」報告はちゃんと聞いていましたつてば。だから、イワたちだけでなく、私たちも付き合つことになつたの

私たちといつも兼を使つ」と、私と辰巳君といつ意味を強調してみた。

「『私たち』つて。今の今まで一人の間には何も無かつたじゃない？」

「うだよね、と同意を求めるよりイワは国山君のことを見上げた。

国山君は困つた顔をして首筋を摩ると、辰巳君の方を見た。

「あ～、本気？」

国山君が辰巳君に聞く。

「うん」

辰巳君が楽しそうに返事をする。

「と、本人が言っているので」

国山君が恐る恐るイワのことを見た。

「そんなの、全然納得できない！」

イワはそう言つと辰巳君に「じゃ、森谷ちゃんの好きなところ言つて」と迫つた。

「ひえ～」と言つ国山君の小さな叫び声をバックに辰巳君が「そんなことでいいなら」と言つた。

イワの更なる睨みで、国山君が慌てて自分の口を手で塞いだ。

「キスしても首が痛くならない」という

さらりと辰巳君がそう言つた。

そのさらりとした言い方に、私をはじめイワも国山君も一瞬「へえ～」なんて相槌を打ちそうになつた。

が。

「キ……」

え、私、辰巳君とそんなことしたつけ？ と、考えた瞬間「なにそれ！ そんなことあつたって、聞いてないよ！」とイワの大声が響き渡つた。

その声に、周りの人たちが驚いた様子で私たちのことを見だした。

「まあ、イワ。落ち着いてよ」と、国山君がイワを宥め始めた。

「ふつー、そんなことまで言わないでしょ。ねつ」と、辰巳君が私を見て微笑んだ。

ここは、辰巳君に従うのが一番と、逆毛を立てているイワを意識しつつ私も曖昧な笑顔で「そういうことで」と調子をあわせた。

「さつ もの、若田さん。面白かったね」

帰りの電車に並んで立ちながら辰巳君が言った。

「イワつて熱い女だから」

でも、そもそも私たちの話の全てが嘘なんだから、イワの反応は正しいといえば正しいのだし。

「熱いか。確かにそうだな」

いつも辰巳君は、小やく笑つた。

「話は変るけど。森谷さんつて、身長、百七十はあるよな」

「うん。下手すると、まだ伸びているかも」

「うわあ。成長ホルモン出まくつだね」

「出まくつ、つて。まあ、そうね。いいんだか、悪いんだか」

いつも答えるながら、ふと頭の中に弟のことが浮んだ。

「そのうち、俺のことも越されたりして」

「辰巳君つて、どれくらい？」

「ん。四か五かなあ」

実は俺も毎年微妙にセンチ単位で伸びてくるんだよね、と辰巳君が

言った。

「森谷さんつて、男の身長にまだわるぽいへー。」

「あ……、どうかなあ。特にそつこつ」とはないけれど

また、弟の顔が浮ぶ。

「俺は気にしないから、どんどんホルモン出して伸びてこから」

「ホルモン、つて」

せつときからホルモンホルモンつて焼肉屋さんみたいだと、笑つてしまひ。

以前から、いつも辰巳君の表現のちょっととしたところが、私のツボにきていて、楽しいと感じていた。

だから、いいと思った。

どんな理由からでも、付き合つてもこいつで。

「あのや。家まで送つてもいい？」

急に辰巳君が真面目な顔になつてそう聞いてきた。

そういう展開になるんだつてことは、共犯して「付き合つ」つて言つた時から薄々は感じていた。

「うん。ちょっと駅から歩くけどいいかな」

私がそう言つと「歩くの好きだから、全然平氣」と辰巳君が笑つた。

アパートの鍵を開けたら、辰巳君に手首をひっぱられて、二人してそのままの勢いでアパートの中に入った。

ドアから外れたばかりの鍵を握り締めたままの状態で、私は背中をそのドアに押し付けられた。

辰巳君の手が、頬から髪の中にずりつと動く感触を感じつつ、その唇も受け止めた。

辰巳君とこうなることが、いつすることが儀式によつても思えたし、また違うところでも、このキスにすがりたい気持もあった。

辰巳君を好きになりたいと思った。

辰巳君も、そなんだろうと思えた。

あのや。国山だけじゃなくて、俺も吉田さんのこと好きだったんだよね。でも、それって報われないじゃない。

冷たい麦茶の感触が頬から消えない時に、そんな告白をされたのがいけなかつたのか。よかつたのか。

そんな告白をしながらも辰巳君が「森谷さんもそうでしょ」と言つてきた冷静さに、救われるよつた思いがあつたのも事実。

そつなんです。

私も、弟が好きなんです。

義理とはいへ、血は繋がつていないとはいへ、彼は家族で。私の中の何かが、やっぱりそつこりとは受け入れられなくて。だから。

辰巳君と、恋愛したいんです。

本当じやなくとも、構わない。

短くても構わない。

形だけでも、弟以外の男の人と、何かを共有したいんです。

辰巳君は「森谷さんもそうでしょ」としか言つてこなくて、頷く私にそれ以上は聞いてこなかつた。

辰巳君が、私のそこまでの話を聞きたいと思つていてるのかもわからぬし、私も辰巳君にそこまで話せるかはわからない。

「涙、出でる」

辰巳君が、そつとその雫を指に載せた。

辰巳君の指の上で、その雫がふにゃと広がつていった。

「森谷さん」

辰巳君がさつままでのキスとは違う空氣で、私の体をふわりと抱きしめてきた。

「ありがとう」「う

辰巳君の言葉が、私の髪を優しく揺らした。

「いらっしゃい」

私もそう言って、ゆっくりと両手を辰巳君の背中に回した。
嘘つきな私は、弟に気を持たせる返事をしたこの部屋で、違う人と始めようとしている。

ちやりんと音を立てて、鍵が手の中から落ちていった。

その音は、私と辰巳君の時間が始まる、合図の様に聞こえた。

「辰巳。私、全然信じてなんかないんだからね

湿氣を含んだ空氣を身にまとひながら、岩田 綾女は俺に会つなり睨んできた。

その類に、一本ほどの髪を張り付けて。

俺は岩田から視線を外すと、彼女が持つ赤い雨傘をそつと取り、まだ留め具もされていないそれをくるんと閉じた。

「俺も、信じてなんかないよ」

そう言いながら傘を返すと、岩田は不機嫌な顔のままでそれを受け取った。

「熱い女岩田」の小さな頭からは、明らかに湯氣が出ていた。

「ところで、なんの話なわけ？」

そう水を向けると、岩田は今一度、頭を沸騰させたような表情になつた。

「モリのこと。モリのこと、決まっているでしょ。辰巳はともかく、モリが辰巳を好きだなんて信じられないってこと」

ああその話、という顔をしたら、まるでその心内を見透かしたように、岩田がキッと睨んできた。

すつゝこまつすぐな眼差し。

そういうふたところが、好きだと思つ。

「ボクつて、そんなに魅力のない奴かなあ

「そーいうことじやなくて」

「そう聞こえる」

「ばか。そんな意味で言つてるんじやないって、分かつていらぐせ

「うかがなあ、と考えるような素振りを見せると、「ああ、そうですか。私の表現力がまづくて失礼しましたね」と若田がふくれた。

「まあ、まあ。ともかくせ、こんなところである話でもないでしょ」

思いつきり朝の通学電車の中なんですけど、と続ける。

「だつて」

若田は氣まどやうな顔をしてぶじつと横を向くと、再び「だつて」と言つた。

「辰巳に会つたら言おうと思つて、でも、他の人がこる時に言つのもなんだし」

若田の言つたこの「他の人」は、国山と森谷さんのことだ。

「他の人? いいえ、他の人だらけなんですけど」

そんな意味じやないことは分かつてゐるくせに、と若田が切り返す。

そして、「ともかく」と言つと、若田は意を決したよつて俺の顔を見上げて、「どうちかが無理をするよつな付き合つは止めて欲しいの」と続けた。

そんなことを言つた若田の顔を、輪郭を、前髪を、頬を、どうやつても自分のものにはならないその全てを、ぼんやりと眺めた。

若田の傘は置めても、頬に張り付いた一本の髪さえ俺には直すことはできない。

「辰巳もモリも私の大事な友達だから、傷ついて欲しくない。気まづくなりたくないの。みんなとずっと友達でいたいの」

俺にとつては絶望的なその言葉を、若田はまるでとても正じいことのように言い切つた。

最初に若田と仲良くなつたのも、そして若田を好きになつたのも、

文句なしに国山だ。

国山が面白によつよつと岩田を好きになつていいく様さまを、俺は半分応援しつつどこかでばかにするような気持ちで眺めていた。

受験真っただ中で、そんなことしちゃう国山をアホだと思つたし、国山がアホになる程岩田が可愛いなんてひつとも思えなかつたから。

それこそむしろ、岩田と一緒にいる森谷さんの方がスタイルもいいし美人だしで、俺だけでなく彼女に注目している奴は多かつたと思う。

だつたらなんで、つて話になるんだけど、人の気持ちの動きというのは不可解なもので、本人にだつてその気持ちの出所は定かではないのだ。

気がついたら、好きだつた。

ただ、それだけのこと。

あの日は雨だつた。

うん、雨だつた。

突然の雨に困つていた俺に、岩田が傘を貸してくれたのだ。

おお、ラッキー、サンキューなんて言いながら、俺は岩田の傘を差した。

そして傘を貸してくれた岩田は、でかいからとの理由で国山と同じ傘に入り、俺の隣を歩きだした。

同じ塾で同じ授業で、一緒に帰るのは日常の事だつた。

岩田と国山が揃つて歩くのも、いつものことだつた。

岩田を傘に入れながら顔を赤くしている国山のことを、いつものようにからかう気持ちで眺めていた、はずだつた。

しかし、一緒の傘に入り歩く一人を見た俺の気持ちは、いつもとは違うものになつていた。

むかむかする、というか、いらっしゃる、というか。
全く、面白くなかったのだ。

いつからどんなことで、岩田に対してもそんな想いを抱きだしたのか分からなかつたけれど、ともかくあの雨の日には既にそつだつた。

気持ちは、もうとっくに動いていた。

やんなつた。
よつによつて、岩田かよつて。

「あ、モリだ」

改札付近で立ち止り、降る雨の様子を眺めていたであろう森谷さんが、岩田の声で振り向いたあと俺に気付き挨拶のように首を横に少しだけ傾げた。

そんな森谷さんの癖も、段々と俺の中で馴染みのものとなつてしまっている。

「おはよ」

森谷さんの少し低い声が、雑踏の中に紛れながら聞こえる。

「おはよ」

森谷さんにそう挨拶を返しながら、俺の中では「大丈夫だよ」という思いが湧きあがつていた。

大丈夫だよ。

森谷さんに対してなのか、それとも自分に対してなのか。
この状況に対してなのか。

改札を出る。

駅舎の軒下で、岩田と森谷さんが傘の留め具を外した。

一色の花が開く。

どんなよりとした空の下に。

薄青い花と、無邪気な赤い花。

その一つがまるでおしゃべりをするかのような明るさで、俺の前でくるんと揺れた。

青い花を選んだのは、俺。

でも、心にはまだ赤い花がある。

じりじりと焦がすように、焦がれる様に、心で咲いている。

大丈夫だよ。

振り向く森谷さんの顔に、さつきの俺と同じものが見えた。

彼女の心にあるのは、どんな意味の「大丈夫」なのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2008t/>

この恋の行方

2011年5月12日01時10分発行